

成屋形遺跡

古代住居址発掘調査報告

は し が き

1. 本書は、1969年11月、エーザイ株式会社の依頼により緊急発掘調査を実施した、福岡県筑紫郡太宰府町大字水城字成屋形所在の古代住居址に関する発掘調査報告書である。
2. 調査にあたって、エーザイ株式会社、同根岸 氏、および地元関係者に多大の援助をうけたことを銘記し深甚なる謝意を表する。
3. 調査団の編成は次に記すごとくであるが、本稿の執筆および製図は、Ⅰ～ⅢおよびⅤを亀井明徳が、Ⅳを横田賢次郎が分担してあたり、写真および編集は亀井が担当した。

調 査 関 係 者

福岡県教育委員会

藤井 功 横田義章 亀井明徳 山本輝雄
横田賢次郎 石丸 洋

他に

下条信行 宮小路賀宏 栗原和彦 柳田康雄
の各氏の援助をうけた。

目 次

Ⅰ 遺跡の環境	2
Ⅱ 調査の経過	4
Ⅲ 検出遺構	6
Ⅳ 遺 物	8
Ⅴ む す び	19
図 版	

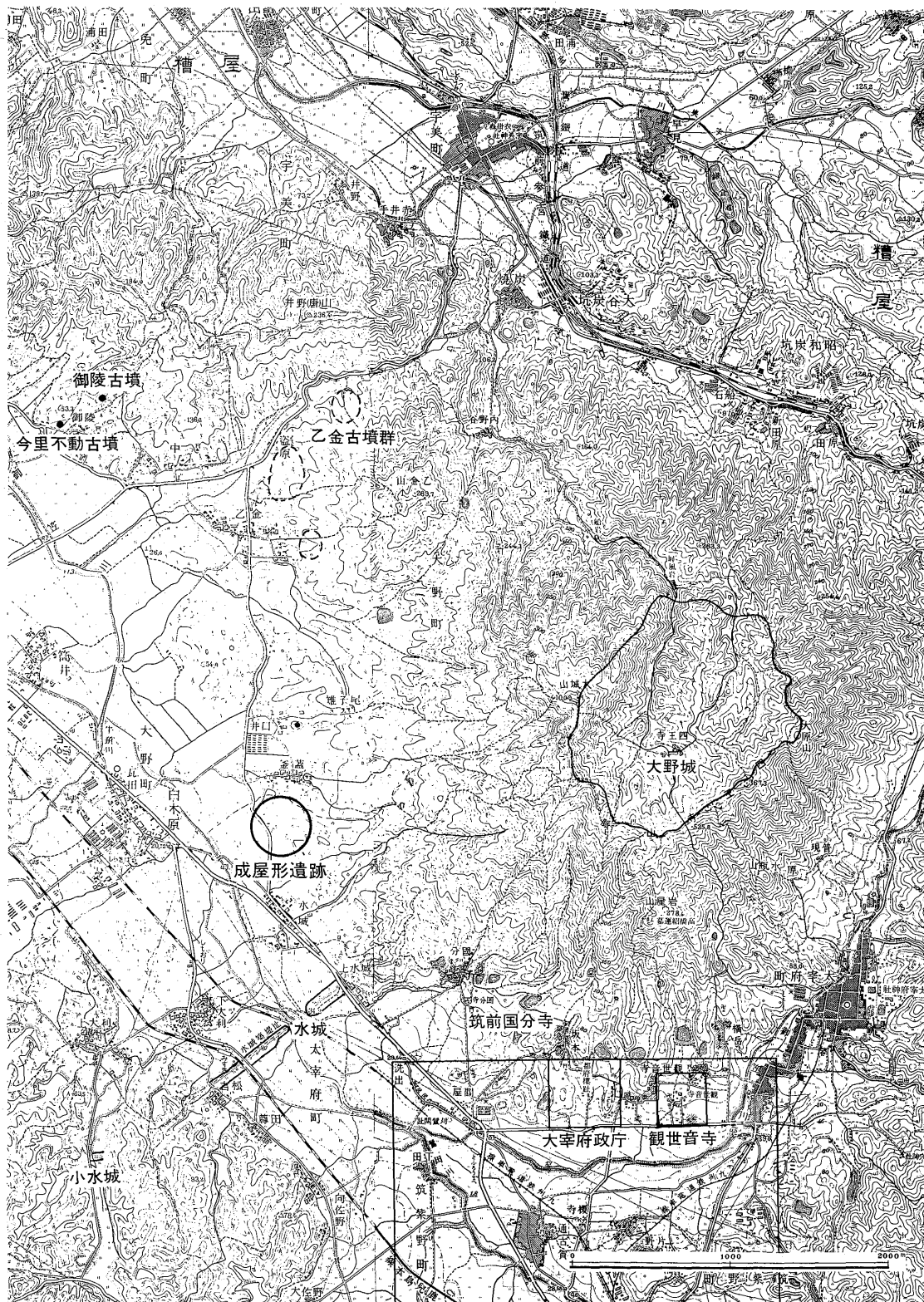


Fig.1 成屋形遺跡周辺主要遺跡図

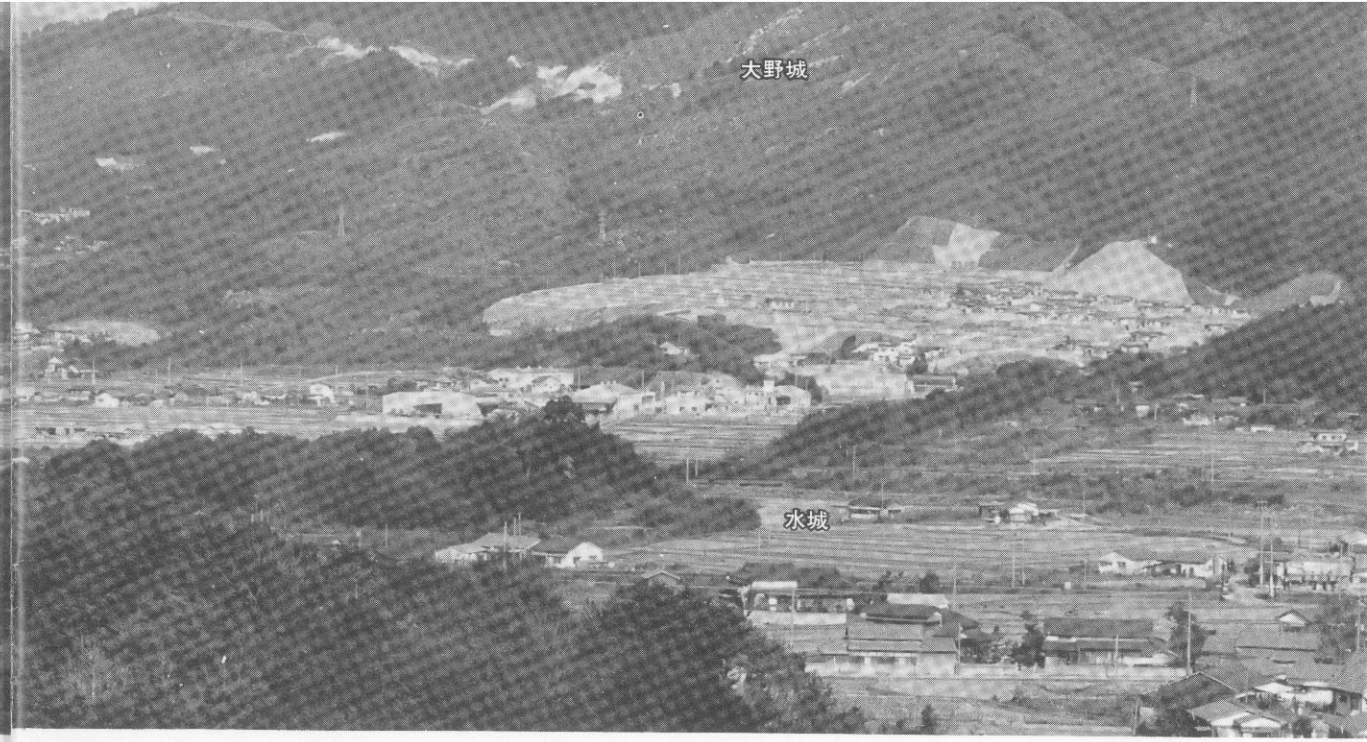
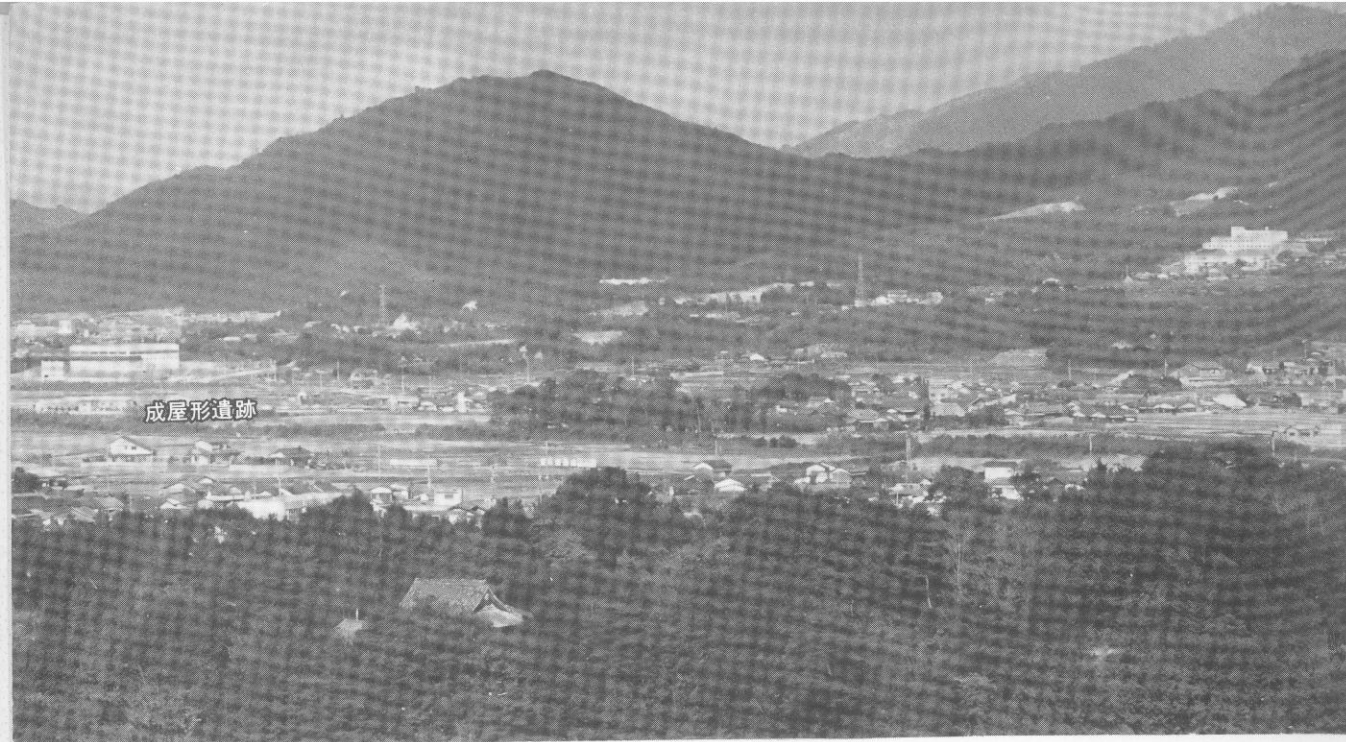


Fig.2 水城から成屋形遺跡の遠望 西から

I 遺跡の環境

那珂川と共に福岡平野を肥沃な沖積地にした御笠川は、大宰府にその源を発し、この平野の東を限る丘陵に平行して北流し博多湾に注いでいる。この川の右岸は、大城山の標高410mを最高所とし漸次高さを減じつつ、その間に沖積部に向って多くの小支丘を派出させている。こうした平地と山丘の接触地点の地名は「月隈」「金隈」など「隈」と呼称されているが、古代の遺跡とくに墳墓は、この隈に多く占地している。1969～70年に発掘調査し150基に及ぶ甕棺群を検出した金隈遺跡^(註1)、御陵古墳^(註2)（三角縁神獣鏡出土）、古墳時代後期の巨石墳としての今里不動古墳あるいは乙金地区の群集墳などがみられる。成屋形もこの隈に当たり、西北方向に平地に突出し水田面からの比高12mの丘陵上を中心として遺跡が分布している。現在の御笠川との直線距離は350mである。この丘の上に立つとき、西北方に開ける福岡平野と、その対岸には須玖の丘陵を望見できる。この地に遺跡があることは古くからしられ、かつて森本六爾氏も踏査している。今回の調査を含めて過去4回の調査がおこなわれた。第1回の調査は1930年10月、山本博、山本嘉蔵の両氏によっておこなわれた。その結果、小封土の河原石積竪穴式石室3基を調査し、そのうちA号から鉄剣1、細根鉄鏃30、B号から乳文鏡1、C号から珠文鏡1を発見し、さらに甕棺2を確認している^(註3)。

第2回の調査は、三野章氏等によって1968年におこなわれ、すでに報告書が刊行されている^(註4)。それによると、段丘上から石蓋土坑1、箱式石棺1、古墳2、竪穴住居2を検出している。石蓋土坑および箱式石棺は県道際の即ちこの段丘の突端部に近い位置に構築され、ともに副葬品は発見されていないが、箱式石棺の近くから弥生後期の土器片を検出している。古墳2基はいずれも横穴式石室で、破壊が著しいが、そのうち1号墳は周溝をもつ径11.2mの円墳で、細根式鉄鏃3を発見している。また竪穴住居址はいずれも一辺約2.7mの方形プランを呈し、弥生後期と推定している。

第3回目の調査は、1969年に松岡史、塩屋勝利氏等によって前回の南隣接地を発掘調査した。

- (註1) 折尾学他『金隈遺跡、第一次調査概報』福岡市文化財報告 第7集 1970
- (註2) 大野町中韓人池の北側丘陵上から出土した。古墳は明治年間の発掘のため不明のところが多いが、円墳・箱式石棺であろう。この鏡は、天王・日月獣文帯四神四獣鏡で、豊前石塚山古墳に同範鏡がある。
- (註3) 山本博・山本嘉蔵「福岡県成屋形の古墳について」史淵2 1930
- (註4) 三野章『成屋形遺跡調査概要』福岡県教育委員会・エーザイ株式会社 1968
- (註5) 塩屋勝利氏の教示による。

報告書は刊行されていないが、注目すべき墳墓群を検出している^(註5)。すなわち台地の先端部近くから方形周溝墓2と近接して箱式石棺1を発見調査した。この方形周溝墓は、ともに一辺約10mをはかり、内部主体は同一方位の箱式石棺を各1つつ埋置している。これら弥生終末期と考えられる墳墓の東側の丘陵尾根に小形河原石積石室6基を検出しているが、これらは第1回の調査によって発見されたものと同一性格をもつものであろう。その他にこの墳墓群の中心的位置に周溝をもつ径約40m、高さ3mで、西側に造出しをもつ円墳（横穴式石室カ）がある。いづれにしても複合した時期の墳墓群であり、報告書の刊行が待たれる。

今回の調査すなわち成屋形遺跡第4次調査は、以上の墳墓群の位置の南側の隣接地域について行った。墳墓群が丘陵上に占地するのに対し、今回の調査はその南側の傾斜面を発掘調査した。

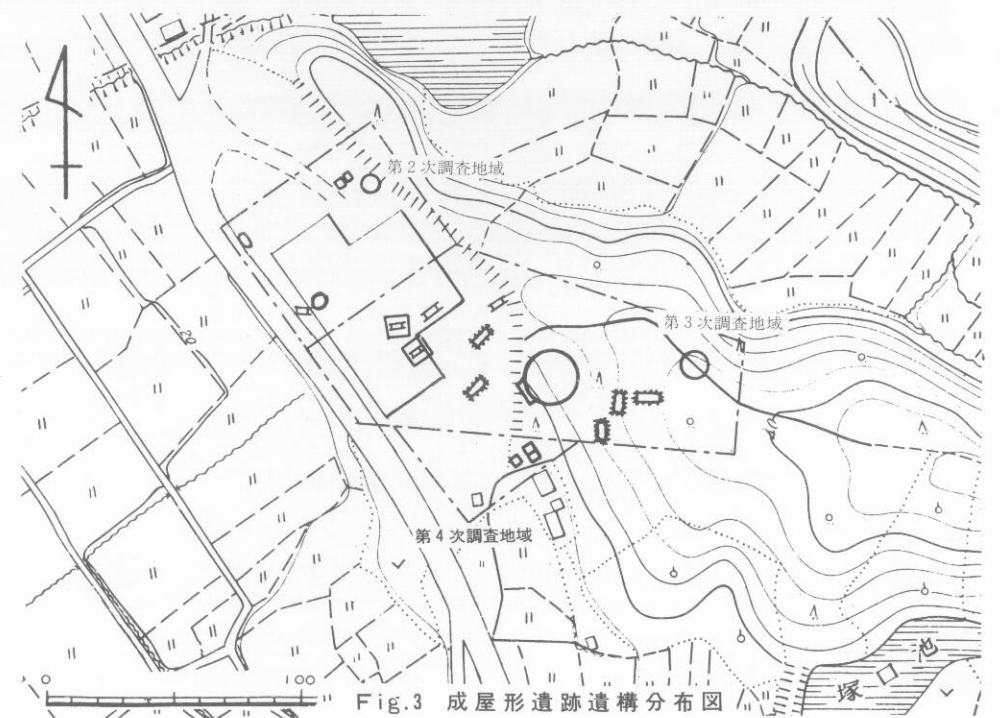


Fig.3 成屋形遺跡遺構分布図

II 調査の経過

今回の成屋形遺跡第4次調査は、前回と同様にエーザイ株式会社福岡支店発送センター建設のための事前調査として実施された。

1969年8月11日、当該地の埋蔵文化財発掘届が土地所有者から提出され、太宰府町教育委員会を経て10月7日福岡県教育委員会から文化庁へ進達された。地番は、福岡県筑紫郡太宰府町大字水城字成屋形566、同565-1および562-8の3筆の計2,413㎡であるが、566番地は宅地のためこれを除く他の2筆が調査の直接の対象となった。発掘調査は、同年10月30日から11月10日までの11日間（7日を除く）に行った。

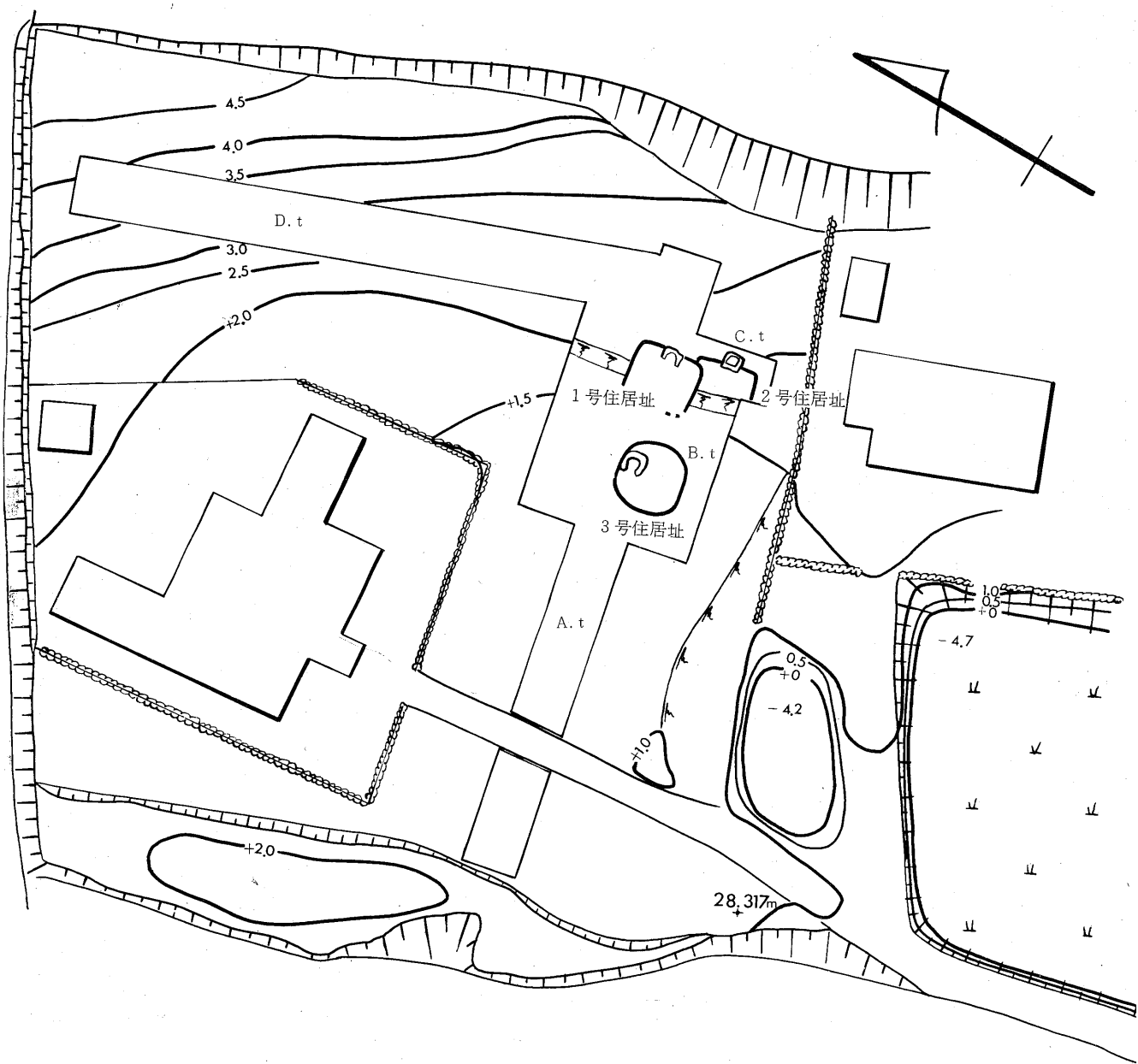
遺跡は東側の丘陵から西に向って約30°の傾斜面に位置する。この傾斜面は、一部密柑畑として利用され、他は段落を設けて畑地となっていたが、土器および瓦が地表面に散布していた。調査はこの傾斜面に直交する東西方向のAトレンチと、これに直交し傾斜面に平行する南北方向のDトレンチを設定し発掘を開始した。

まずAトレンチ西端において地山が西へ緩傾斜で上っていくことを確認したが、これは既に削平整地された県道の東接地がかつては小丘状をなしていたと云う地主の言と一致している。さらにAトレンチの東端付近の斜面は、作土が浅くすぐに黄褐色花崗岩パイラン土の地山に達し、旧地形の山丘を切りくずして耕地化したことが認められ、従って遺構の遺存状態は良好でないことが予想された。しかしながら、換傾斜線附近において、炭化物と土器片の散布状態を認め、精査の結果第1号竪穴住居址を、さらにその南に相接する第2号竪穴住居址を各々検出した。そして1、2号住居址の西約2mのやや平坦地に第3号竪穴住居址を検出した。いずれの住居址もその西半部を畑の段落ちのために削平されていたが、1、3号住居址は、わずかに残存する遺構から、ほぼその全形を復元することができた。

以上の調査は10月30日の表面観察に始まり、11月9、10日の補足調査をもって全て終了した。検出した遺構は現在エーザイ株式会社福岡発送センターの正門から続く舗装道路の下にそのまま埋没された。出土遺物は全て大宰府発掘調査事務所が保管している。



Fig.4 遺跡全景（南西から）



既整地

県道水城下白井線

Fig.5 成屋形遺跡地形図

III 検 出 遺 構

発掘調査の結果検出した遺構は、竪穴住居址3棟である。相接する第1号および第2号住居址は7世紀後半に、第3号住居址は奈良時代後半期にそれぞれ位置付けられる。以下遺跡の微地形と各々の住居址について記述する。

遺跡は、成屋形墳墓群の占地する南北方向の丘陵の西側斜面に位置する。この緩傾斜面は、南から北へのびる幅約20mの小谷に面し、既述のようにこの谷の西側の現在整地された場所も小丘状をなしていたので、住居址はその東側の谷頭に位置していたことになる。そしてこの東西の丘陵から、現在の畑地との境は開墾によって高さ約1mの段落ちとなっているので、本来さらに標高の高い斜面と考えられる。現在発掘区の最低所は標高28,317mをはかり、この点を0mとしてコンターを求めると、第1号と第2号住居址は+2.0m、標高30mと29.5mのコンターの間に位置し、3号住居址はそれより高さ0.5m下のやや谷側に位置する。A、Dトレンチおよびその拡張区以外に各所に小トレンチを設定し発掘調査したが、遺構は認められなかった。

〔第1号住居址〕

方形のプランを呈する竪穴住居である。東から西への傾斜面に位置し、西半分は畑により破壊されている。遺存状態の良好な東壁の掘り込みは高さ約50cmをはかり、北及び東壁についてもほぼ同様である。完存する東壁の長さは上辺で3.28m、床面で3.22mでN5°Wの方位である。西壁は破壊され明確に確認できなかったが、床面の混入土と遺物の包含状態からみて、東壁から約3mの位置に求められる。従ってこの住居址は南北3.22m、東西3mの方形竪穴住居で、面積は9.66㎡の小形のものである。床面の残存部は平坦で、よく踏み固められており、土器の細片がちらばっているがその量は極めて少い。柱穴は中央に径45cm深さ7cmの円形のもの1個を検出したが、他の柱穴は発見できなかった。住居址内の東南隅の壁面に沿って、幅5cm、深さ4cmの溝があるがコ字形の角だけで、連続して圍繞していない。東壁に附属する竈は、コ字形を呈し、西の谷側に開口し東壁を15cmほど切りこんで造りつけてある。竈の内側は固く、レンガ色を呈した焼土があり、特に煙突部ともいふべき奥壁は暗いレンガ色を呈し特に焼きしまり他の焼土と異っている。これらの焼土をかこみ竈の外壁は地山と同質の土で、若干火にかかって固く変色しているが、壁面との境はつけ難く連続している。さらに竈体に石、瓦、土器等の補強材は入れておらず純粋な地山の土質である。従ってこの竈は壁面の構築と同時に設計、構築されたことを推測させる。竈の前面は約70cmの範囲に半円形で厚さ5cmの炭化物が散布し、一定期間使用されていたことを示している。

〔第2号住居址〕

1号住居址によってその北壁の一部を切断されており、1号住居址と同様にその西半部を削平されているので、精査したが、西壁はついに検出し得なかった。完存する東壁と一部を残存する北、南壁によって復元すると南北は上辺で3.22m、床面で3.15m、東西は1.2mを残すにすぎないが、恐らく1号住居址と同じく3m位の方角プランであろう。従って大きさとしては1号と大差ない小形のものであろう。壁面の掘り込みは東壁で30cmをはかり方位は1号とほぼ同じでN4°Wである。残存する床面は比較的よく踏み固められている。柱穴は床面の中央からやや北寄りに径34cm、深さ45cmの円形のもの、北東隅の住居外で壁に接して径30cm、深さ7cmの浅い円形pitを検出した。東壁に沿って、その中央からわずかに南に寄って竈が造り付けられ、その左側の住居址内東北隅に貯蔵穴が設けられている。

この竈の遺存状態は極めて良好で、主要部を東壁の外側におき、1号の竈と同じく西の谷側に開口し土師製の竈と類似した構造であり、全体のプランはロの字状を呈する。すなわち土製竈の底に当る部分が東壁と平行になりこの部分は粘土混りの地山質の土であり、とくに補強のための

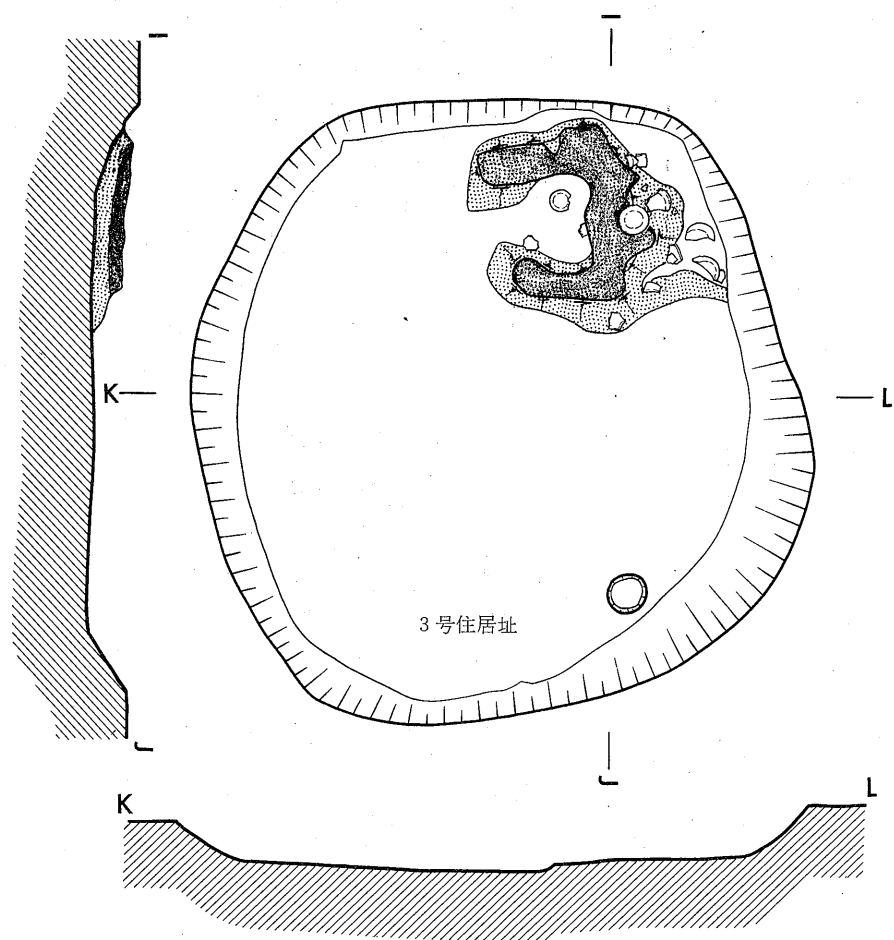
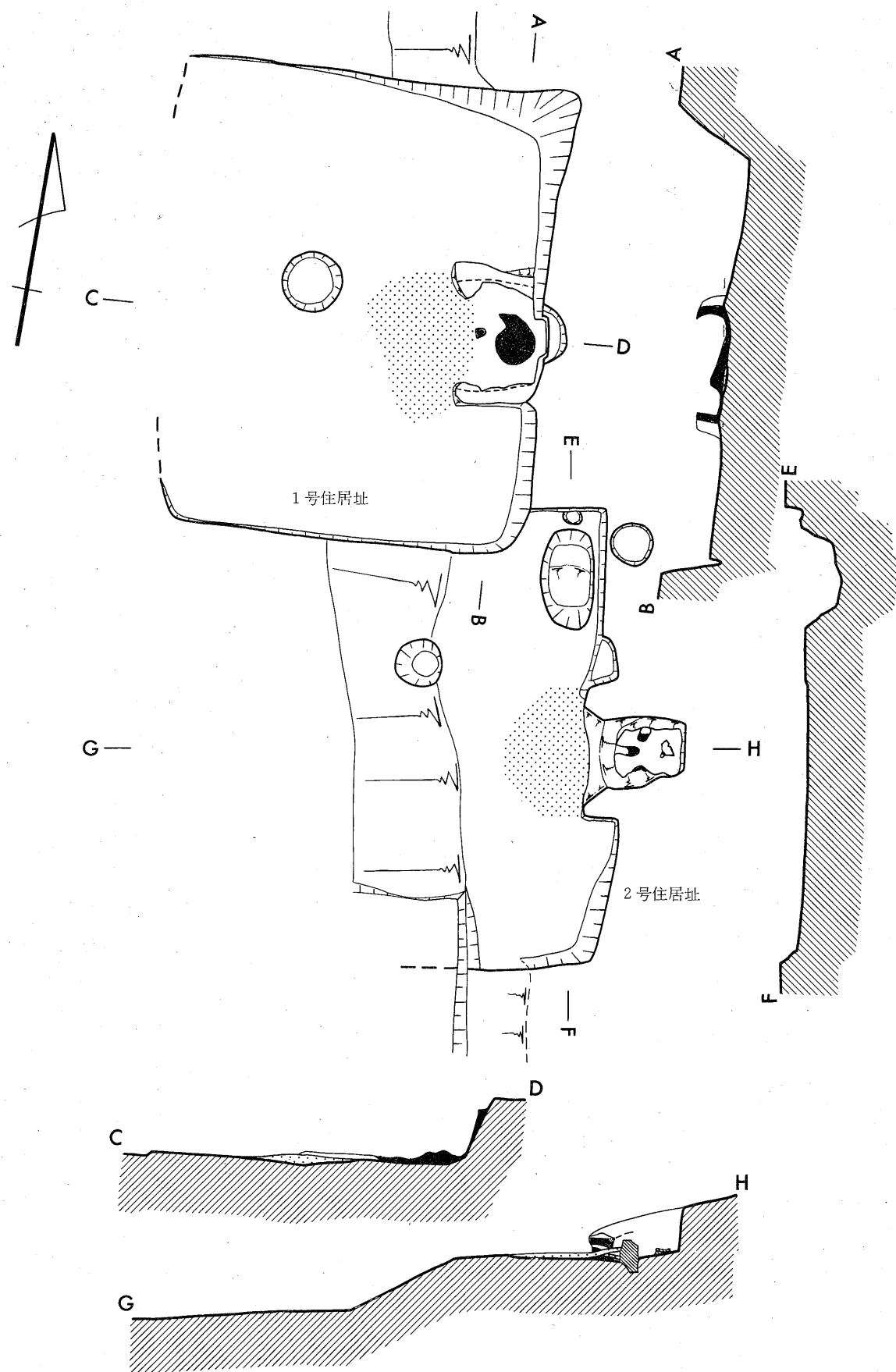


Fig.6 成屋形遺跡遺構図



石、土器、瓦などを粘土内にぬりこめることはしていない。焚口の前面は炭化物が径95cmの半円形で厚さ2～4cmにわたって堆積していた。竈主要部は東壁より外側に突出し、48×35cmの長方形の穴となっている。この底面は炭化物と焼土が堆積し、三方に拳大の赤化した花崗岩の礫がおかれ支脚の役割を果たしている。また底面から甕形土器の小片を検出した。この竈の左側にある貯蔵穴は、70×30cmの長円形のプランで、深さは30cmをはかる。この穴の底面には炭化物が厚さ約5cm堆積していたが、他に遺物は何ら発見できなかった。その他1号住居址にみられた壁に沿う溝などもこの住居址には認められない。

〔第3号住居址〕

第1号および第2号住居址から西へ1.5m離れて第3号住居址を検出した。この住居址も西半部を削平されていたため西壁の検出は困難な状態であったが、残存する点を結んで、図のように復元した。プランは円形に近い形態を呈し径3.4mをはかる。壁は地山の上の堆積土である茶褐色粘質土を切り込んでつくられ、東側の掘り込みは30cmである。床面は明瞭ではないが、その西半部は灰まじりの含遺物層によって切られている。床面の北隅に多量の焼土が堆積し、竈の位置を示していたが、この付近から土師製竈の底部分とおもわれる土器片を検出した。また1、2号住居址のように壁面に竈を造り付けた遺構は認められないので、この住居址は土師製の竈を使用していたと考えられる。遺物はこの焼土付近から発見され、1、2号に比較して多くの土器を検出した。柱穴は住居址内南東隅に径20cm、深さ7cmの円形を呈するものを1個検出したのみである。

さて上述した3棟の住居址は、いづれも異なる時期に近隣地に建て替えられたものである。発見土器からみると、1号と2号は近接した時期に建てられたものであり、3号は1、2号より後出である。そして1号は2号を切って造られていることを考えあわせると、これら3棟の構築順序は、古い方から2号→1号→3号となる。さらに出土土器をみると、1、2号は7世紀後半の接近した時期に、また3号は8世紀後半の時期にそれぞれ位置づけられる。

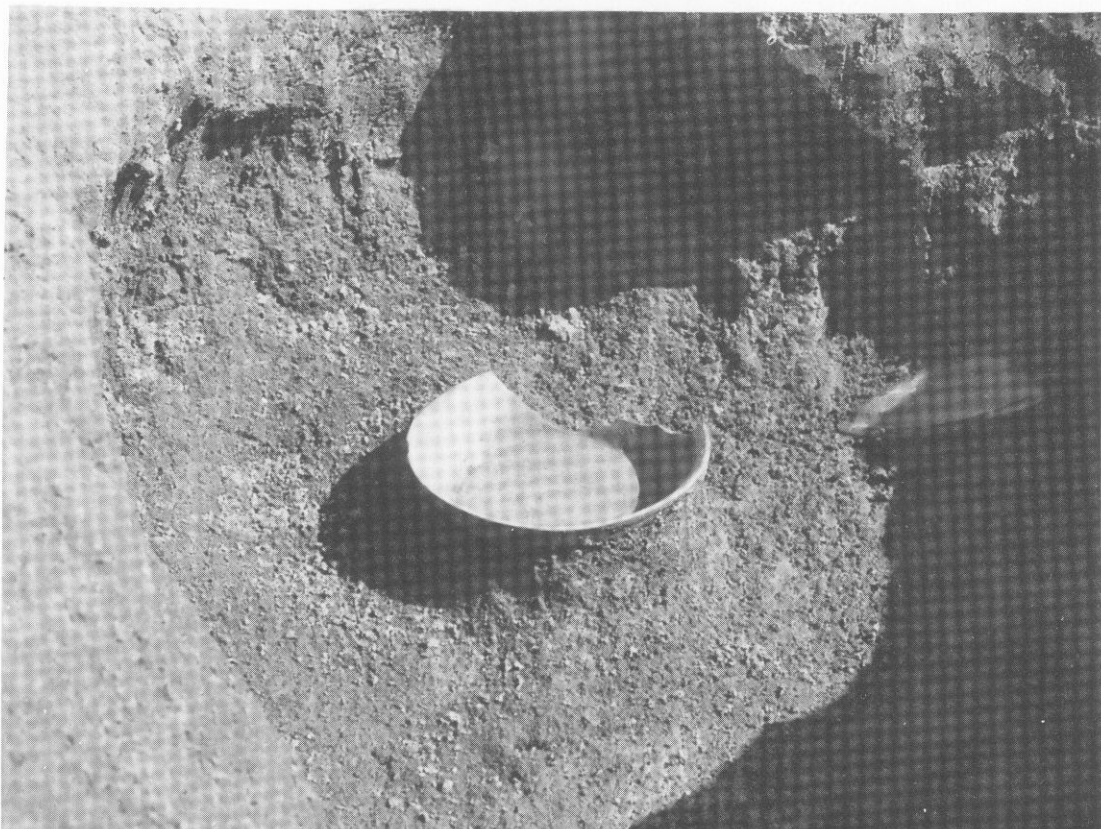


Fig.7 3号住居址焼土内土器出土状態

IV 遺 物

今回の調査で検出した遺物は質・量ともに乏しく、表採および出土した遺物のほとんどが土器であり、その他に瓦片が数点みられるのみである。土器は主として須恵器で、全体の9割を占める。土師器は甕の破片等をごく少量出土したにすぎない。南北及び東西に設定した4本のトレンチ、すなわちA・B・C・Dの各トレンチで最も土器の出土量が多かったのはAトレンチであり、特に1号、3号住居址近くでそれが目立っていた。また、検出した3棟の住居址で土器の出土量が多かったのは3号住居址であり、ほぼ完形に近い高台付の杯及び皿を含む、かなりまとまった状態で検出することができた。1号住居址と2号住居址内の遺物の出土状態は類似しており、その点数も僅かである。また地表面に散布している土器は、既述したようにこの傾斜面を畑地化した際の遺構の破壊によって生じたものと考えられる。以下、各住居址および各トレンチごとにその特徴点を記述してみたい。

第1号住居址遺物 (Fig. 8 1~3)

遺物は土器のみで、その数は少ない、(1)~(3)は須恵器で床面と竈の焼土中から出土したものである。また竈内からは火気で赤化した土師器の小破片を検出した。

杯 蓋 (1・2) いずれも小破片のため全形をしり得ない。(1)は床面の焼土中から出土したもので、天井部のつまみは中央部がやゝくぼんだ形をしている。(2)は竈内から検出したもので口縁端部内面に三角形のかえりを有する。VIのa期に属するものであろう。

杯 身 (3) 暗灰色を呈する丁寧な作りの土器である。底部からの立ち上がりは丸味を帯び、ほぼ直線的に上外方にのびる。底部は未調整で、体部と口縁部は横ナデによる手法である。

第2号住居址遺物 (Fig. 8 4~7)

土師器甕の口縁部(7)は住居址竈内から発見したものであるが、(4)~(6)の杯身はいずれも住居址上層から出土したもので、この住居址に確実に伴うものとは言い難い。

杯 身 (4~6) いずれも高台をつけたもので、(4)は底部を欠いているが、おそらく(5)(6)と同じ形状のものであろう。(4)の体部は丁寧な横ナデをおこなっており、中央でやゝ外反しながら口縁に至る。(5)と(6)の底部からの立ち上がりは異った形態を示している。(5)は丸味をもって立ち上がり(6)のそれは角張っている。またその体部は(4)に比べて厚くなる。(4)~(6)は胎土、焼成とも良好な土器である。

甕 (7) 竈内から検出したものでこの他にも土師器の小片を出土した。暗褐色を呈する焼成の粗雑な土器で、外面の手法は摩滅が著しいため不明確である。内面はへら削りを行っており、やゝ黒ずんでいる。器体の最大巾は口縁にあり、長胴の長甕である。

第3号住居址遺物 (Fig. 8 8~30 Fig. 9 25~30)

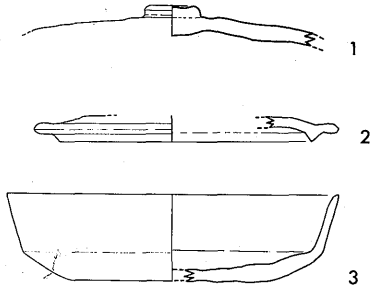
検出した3棟の住居址で最も土器の出土量が多かった。出土の土器のほとんどが須恵器で土師器は僅少である。須恵器の器種は杯蓋、皿、杯身、高杯で、そのうち出土量が目立って多いのは杯蓋(8)~(18)の類である。土師器は甕の小片のみで、他に土師製竈の破片が1点ある。

杯 蓋 (8~18) この住居址から出土した杯蓋は形態の上から大きく3つに分類できる。すなわち、口縁端部内面に断面三角形のかえりを有するもの、口縁端部を短かく折り曲げたもの、および大形の蓋の3つである。

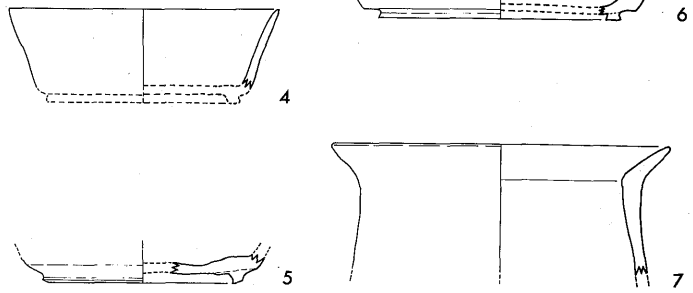
a - (8) 口縁端部の内面に断面三角形のかえりを持つもので床面から検出したのは一片のみである。

b - (9~16) 口縁端部が短かく屈曲するもので先端はにぶい稜をなす。この中には器高が高く、天井部がふくらみをもつもの(10~14)と器高が低く扁平なもの(15)(16)、また口縁端部が嘴状になったもの(9)がある。(10)(12)(13)は口縁端部の外面がやゝ平らになり(11)(14)と異っている。また天井部は荒いへら調整を行っている。(15)(16)は扁平で端部の身うけはほぼ垂直に下方へつまみ出され口唇は下方へ開いた形で先端は尖っている。(16)のつまみは頂部がやゝくぼんでいる。

第1号住居址 (1~3)



第2号住居址 (4~7)



第3号住居址 (8~30)

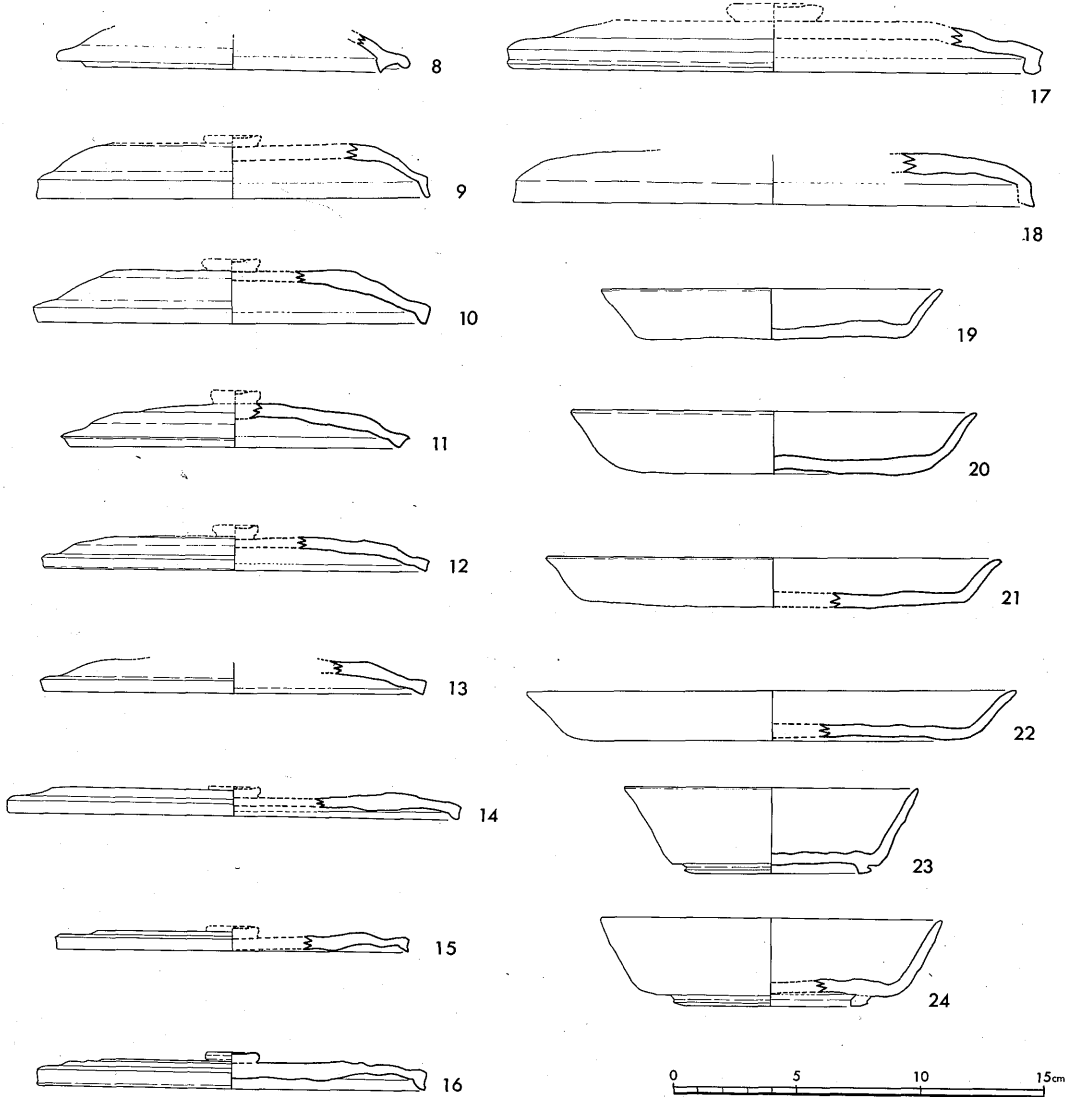


Fig.8 成屋形遺跡出土土器実測図

c - (17・18) 大形の蓋で器肉も厚く口縁端は下方に折り曲げただけで、(18)はにぶい稜をもち、(17)は内向気味で屈曲している。いずれも天井部を欠損しているが、つまみを有するものであろう。復元口径は約22cmで、床面から出土した。

皿 (19~21) 器高は2cm前後で同一であるが口径は14cmと20cm前後のものがある。(19)は底部から体部へ急傾斜で立ち上がり口縁部付近で僅かに外反する。灰色を呈し、全体に丁寧な横ナデ調整がみとめられる。(21)は底部から丸味をもって外方へのび、口縁部は外反気味である。焼成が悪く摩滅がひどい。

杯身 (23~28) 高台を有する杯で(23)(24)を除いていずれも底部のみである。高台の形は一定でないがⅥ期のものに比較して短く張りもなく退化している。底部と体部との境界が屈曲して明瞭なものと、や・丸味をもって立ち上がるものの二種類がある。(23)(25)(28)は前者で、高台から近い部分で鋸形に折曲り角張っている。(23)は完形に近い堅緻で丁寧な作りの土器である。器高は低く、口径も余り大きいものではない。体部はわずかに外反しながら口縁部に至る。底部は未調整で、体、口縁部は横ナデ調整を行っている。また高台底部には平行の線状圧痕が認められる。(24)(26)(27)は後者の形態である。(24)は器高において(23)と同じであるが、口径はや・大きくなる。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外上方へのびる。手法は(23)と同じである。

高杯 (29) 脚部のみで全体の形状は不明である。脚の筒部内面にはしほり目が顕著である。

甕 (30) 土師製の甕の前面底部の一部を床面より検出した。下部に近い部分で、下方がや・肥厚している。胎土は荒砂が目立ち粗雑な作りのものである。その他、土師器甕の口縁部の小片および把手部分等が土師製甕と相伴していた。

A トレンチ遺物 (Fig. 9 31~35)

耕土および床土から出土したもので、1号および3号住居址の周辺において出土量が多い。

杯蓋 (31~33) 口縁部から天井部にかけてふくらみをもつ(31)(32)は内面に三角形のかえりを有し(8)と同形式である。(33)は宝珠形のつまみをもつ。

杯身 (34・35) 底部と体部の境界は屈曲して明瞭である。(34)の体部はや・内彎気味で丁寧な横ナデ調整を行っている。(35)は(34)に比べ口径が大きくなりほぼ直線的に外方へのびる。高台はいずれも短い。

B トレンチ遺物 (Fig. 9 36~40)

B トレンチに設けた側溝の表土下約1mの茶褐色土層から検出したものである。

杯蓋 (36・37) 口縁端部はわずかに下方につまみ出ただけであり(37)の口縁部先端は明瞭な稜をなす。3号住居址出土の杯蓋a類に属する。

杯身 (38~40) いずれも高台を有し、底部から体部へはゆるやかなカーブを描いて立ち上がる。(38)(39)の高台は厚く端部が極端に外方へ屈曲し力強い作りである。須恵器Ⅵ形式aに属するものであろう。

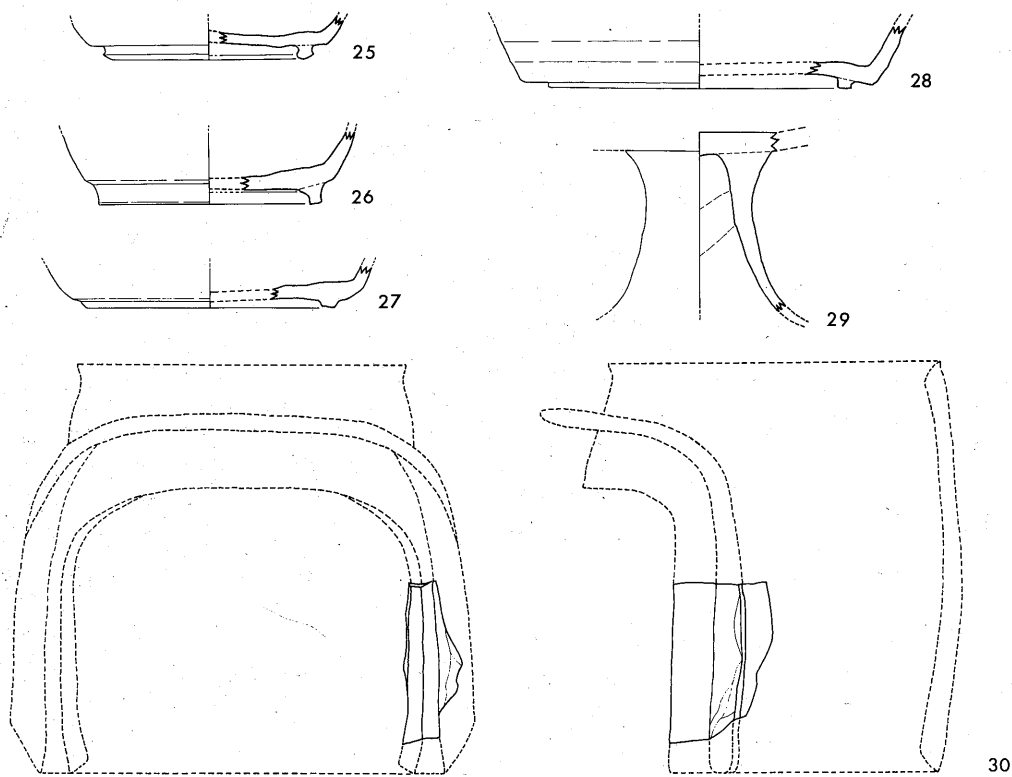
C トレンチ遺物 (Fig. 9 41~43)

杯蓋 (41) 口縁端内面に内向した三角状のかえりをもつ。

杯身 (42) 高台は厚く短く、端部はまるくなっている。

皿 (43) 浅い皿で口縁部は浅い体部から屈曲して短かく外方へ開いている。

以上、3棟の住居址および各トレンチ内出土の遺物について観察し、その特徴を述べた。出土した土器は破片が大部分で全体の形状をしれるものはわずかであった。おわりに各住居址のおよその時期を考えてみるならば、第1号住居址出土の須恵器のうち甕内から検出した(2)はⅥのa期に比定できよう。つぎに2号住居址の土器は、既述のように(7)以外はこの住居址に確実に伴うとは言い難く、(7)の土師器一片で時期を決めるのは危険ではあるが、真間期の土器であろう。3号住居址の土器は量的に豊富であり、若干時期を異にするものも認められるが、Ⅶ期の須恵器が大部分を占める。さらにⅦ期自体の良好な資料は現在のところ少ないので、このなかをさらに分類するのは困難であるが、形状としてⅦ期のうちでも後半に属するものであろう。この点は今後の資料の増加によって再検討されるべきものと考えている。



その他 Aトレンチ (31~35) Bトレンチ (36~40) Cトレンチ (41~43)

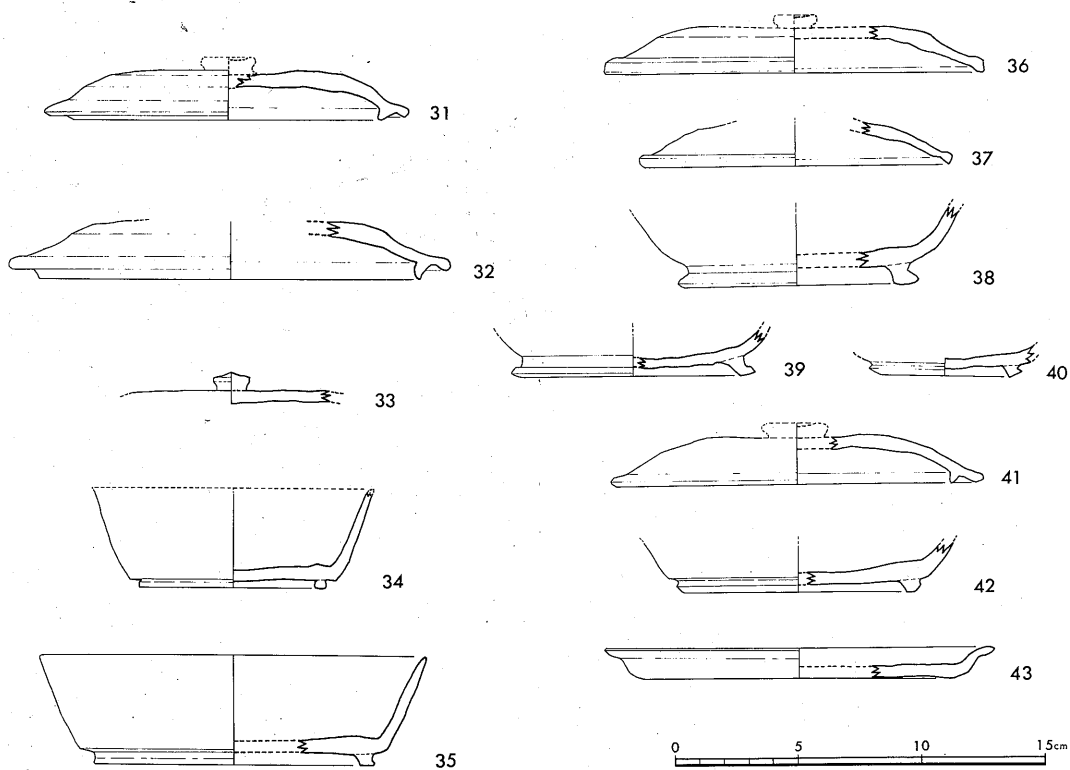
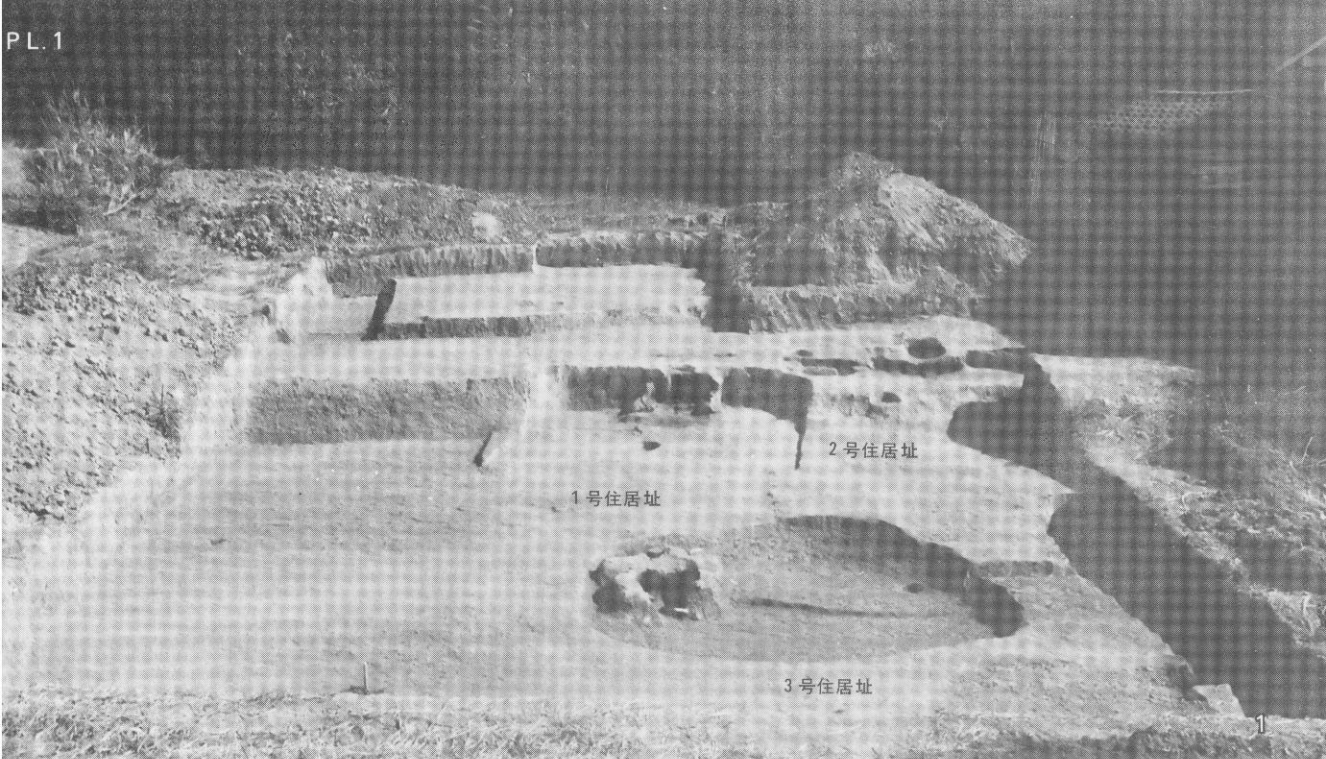
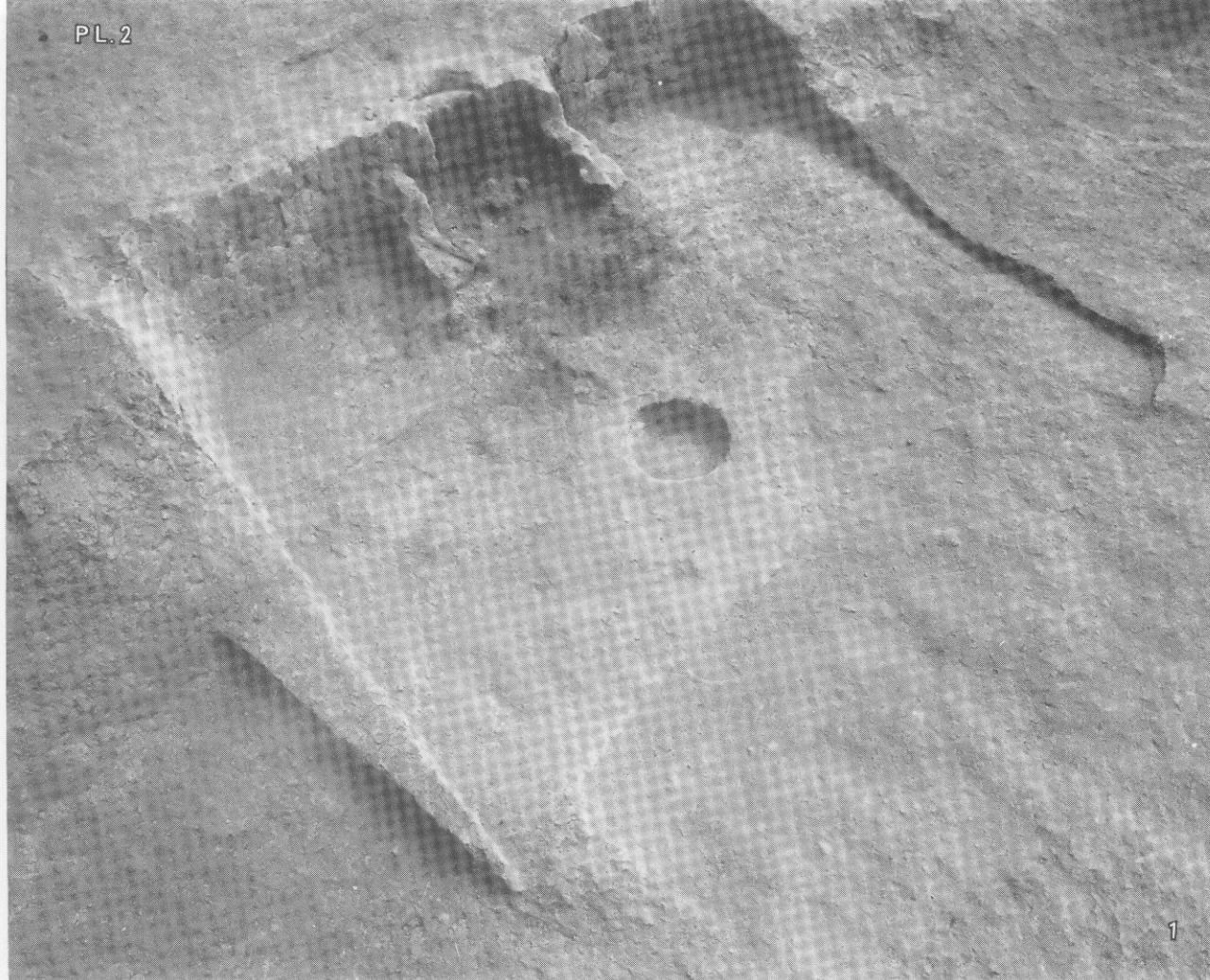


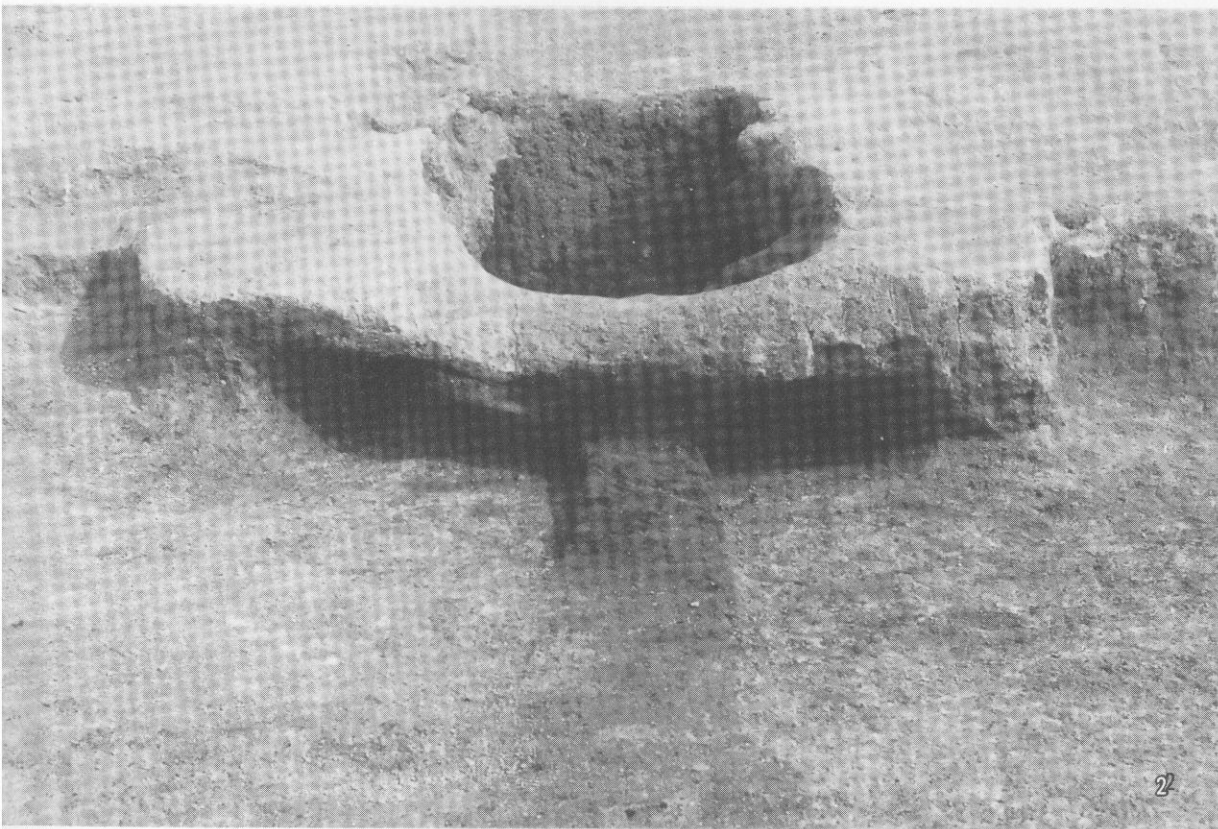
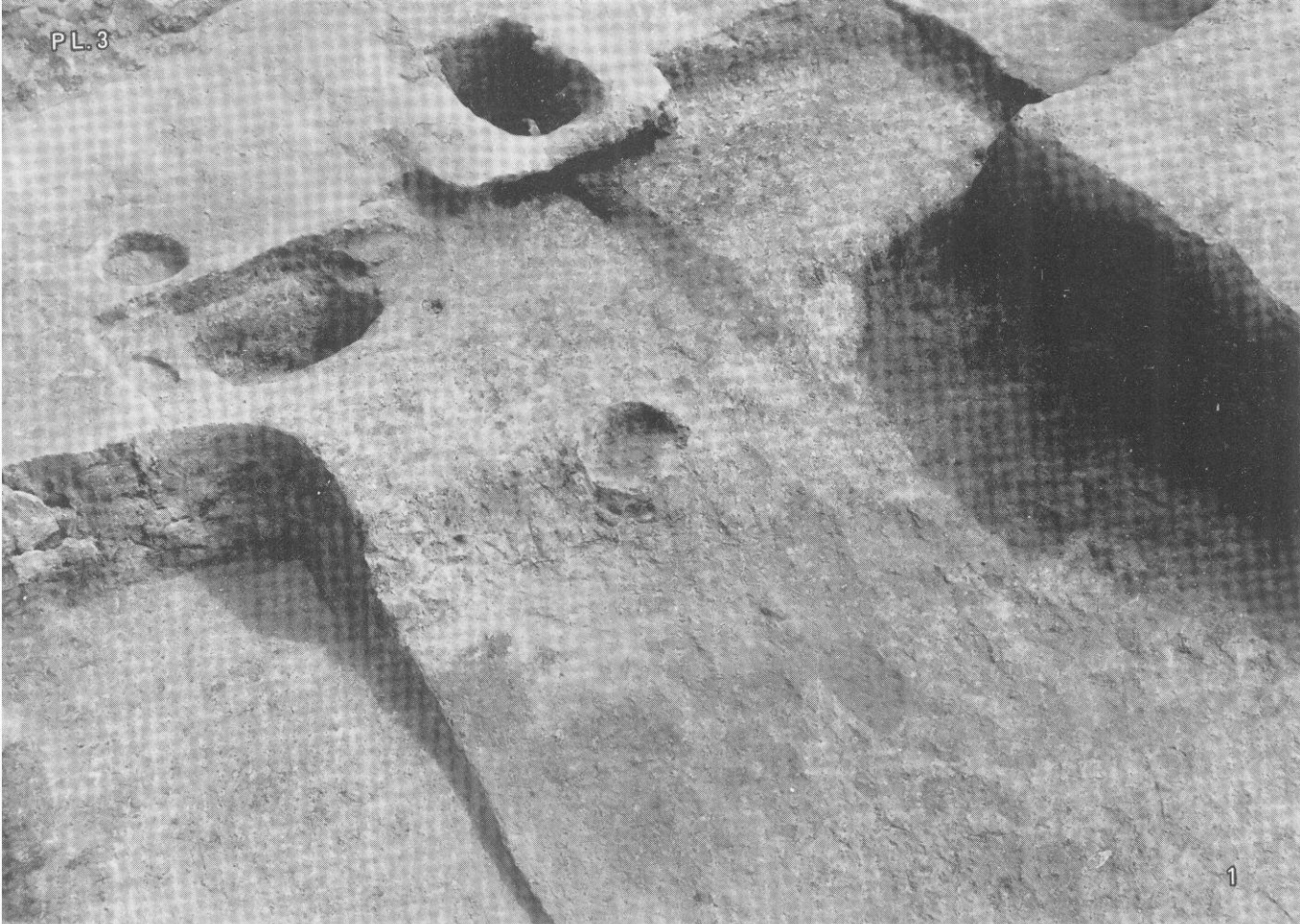
Fig.9 成屋形遺跡出土土器実測図



1. 遺構全景 西から
2. 1号(左), 2号(右), 3号(手前)各住居址 西北から



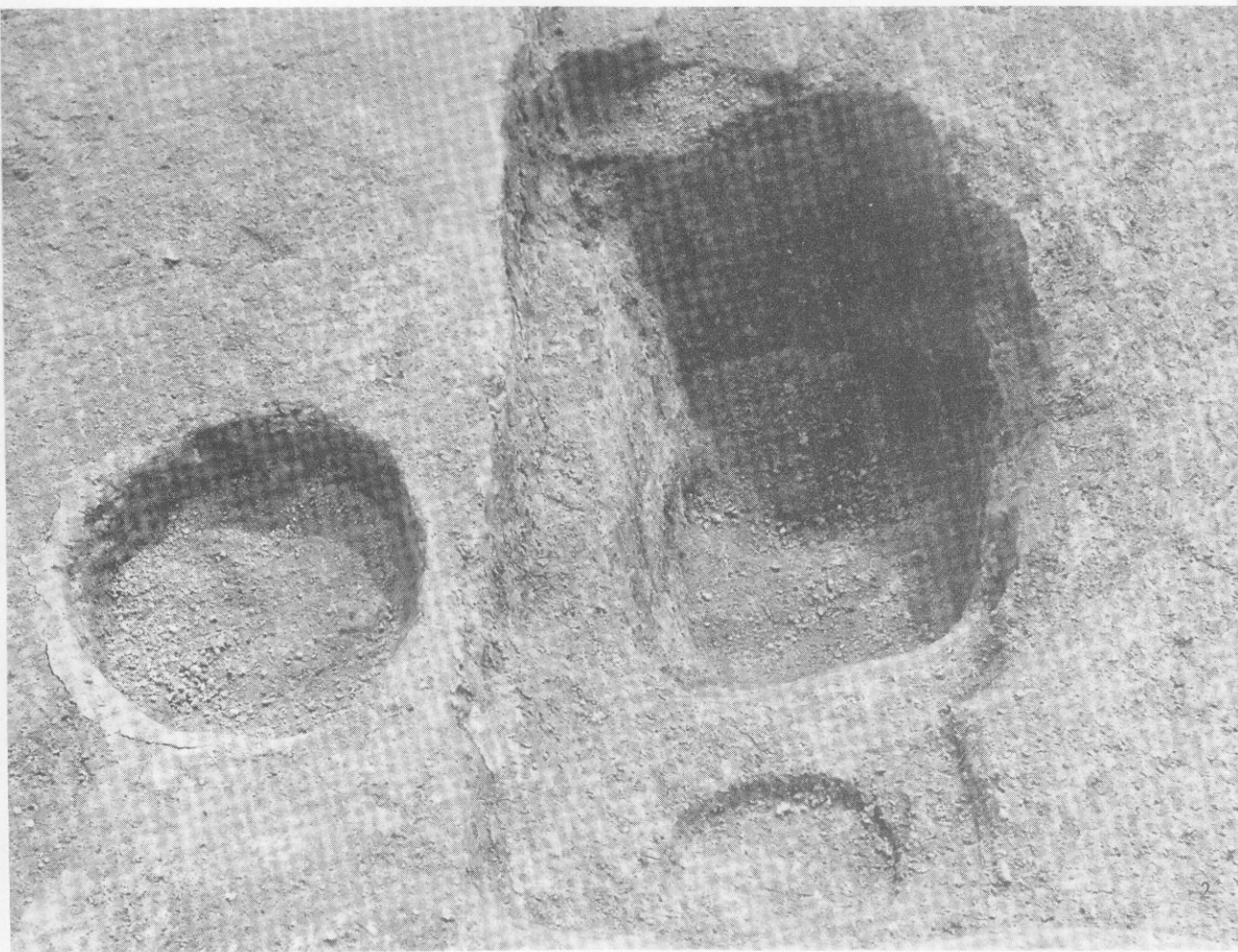
1. 2.
1号住居址竈部分 西から
1号住居址全景 西北から



1. 1号(左)および2号住居址全景 西北から
2. 2号住居址竈部分 西から

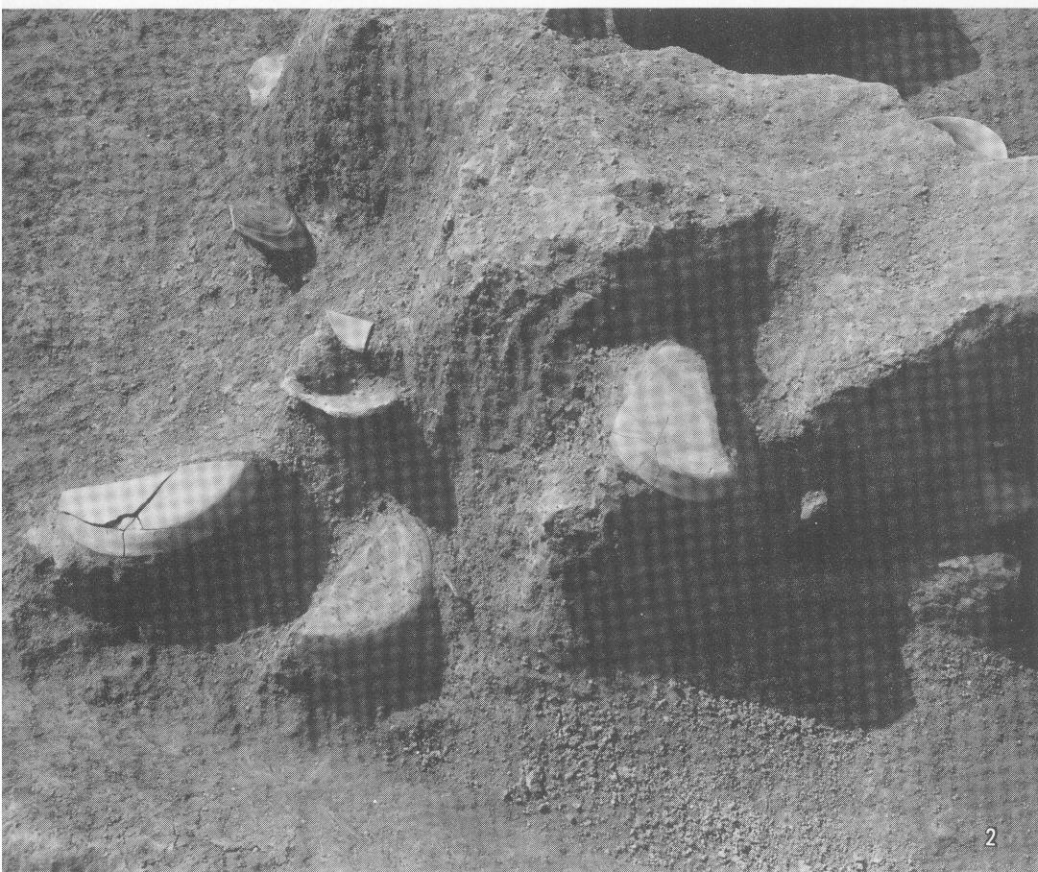


1

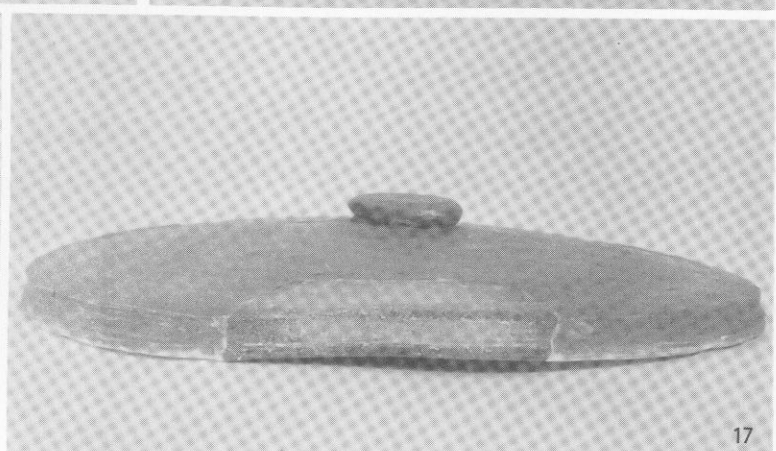
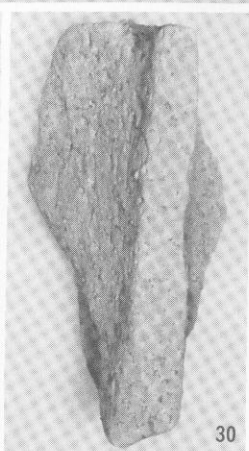
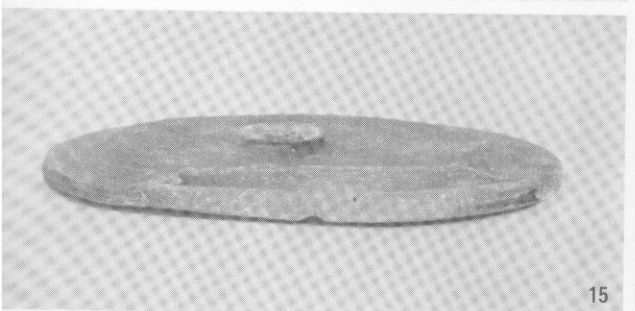
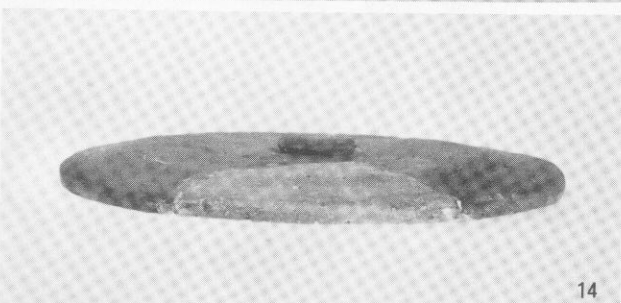
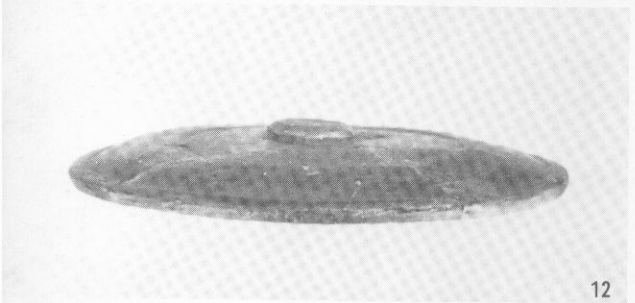
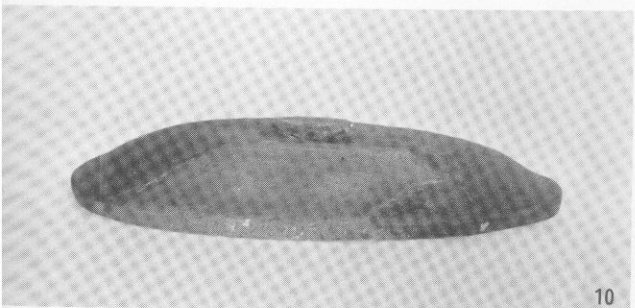
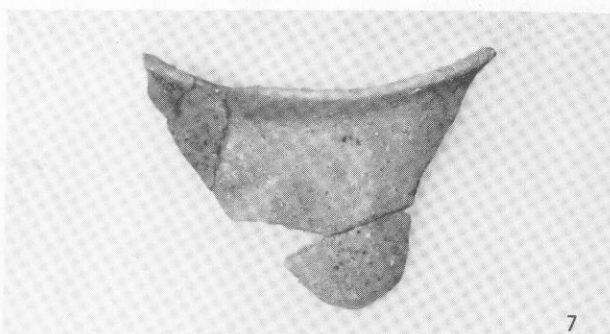
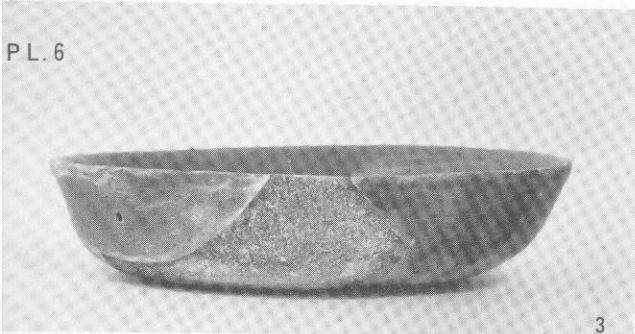


2

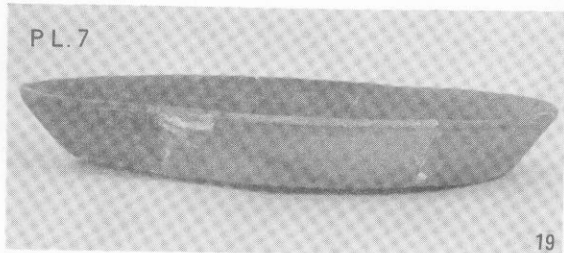
1. 2号住居址竈部分 北から
2. 2号住居址北東隅貯蔵穴 北から



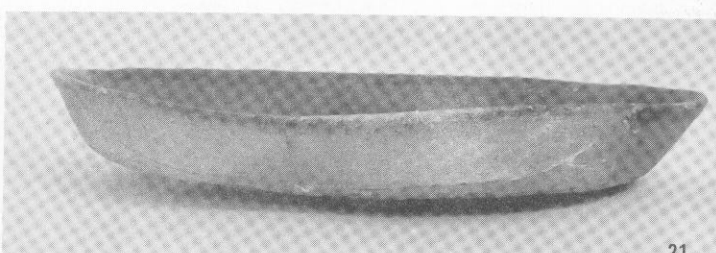
1. 2.
3号住居址土器出土状態 西から



PL. 7



19



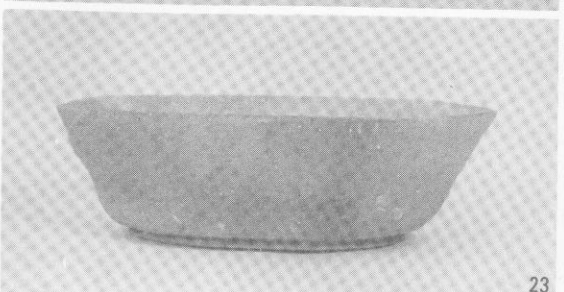
21



20



22



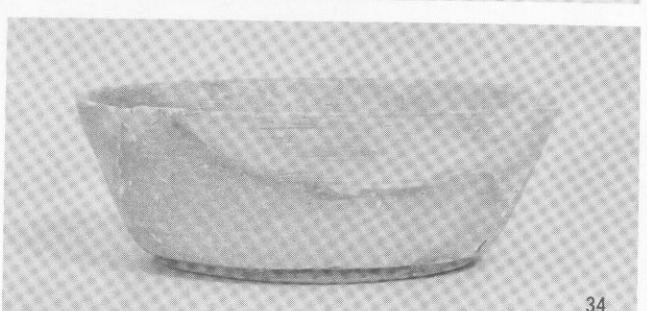
23



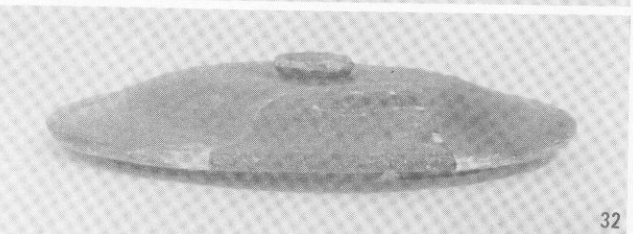
24



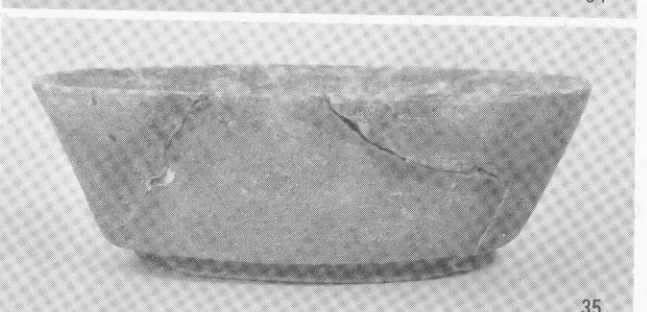
31



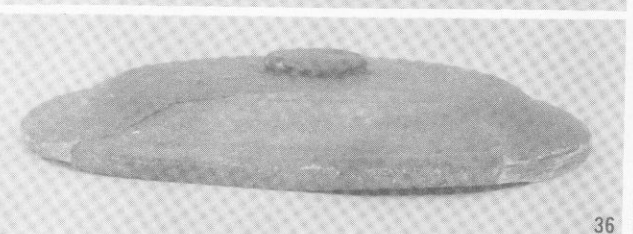
34



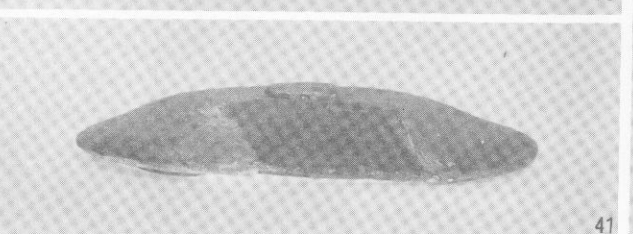
32



35



36



41



43

V む す び

上述してきたように今回の成屋形遺跡の発掘調査によって時期を異にする住居址3棟を検出した。近時盛んにおこなわれるようになった大規模な集落址の調査に比較するとき、これはまことにささやかな、貧しい調査にすぎない。しかもなお各住居址の出土遺物は質量ともに乏しい。しかしながら、従来弥生～古墳期の住居址の調査に比較して700年前後の住居址の調査は九州においてはあまり行われていない、従って今回の調査の一定の成果とそこから導き出される問題点を指摘し、後日に備えることは十分意義のあることといえよう。

まず第一に、3棟の住居址の時期、すなわち7世紀後半～8世紀後半期において、この地は大宰府条坊の北限より1.5km北に、水城の外側1.2kmの地に位置する。当時大宰府条坊内には官人層だけでも数千人の人口があり、政庁を中心とした地域は官人層の大邸宅が軒を並べていたことが予想されるが、一步条坊外にでるとき、今回の調査によって検出されたような小規模な住居が極めて一般的な姿として存在していたのであろう。

3棟の住居址はいずれも10㎡前後の床面積である。ここから竈部分の面積を引いた値が居住面積と考えるならば、いずれも9㎡前後が実際の居住面積である。いま関東におけるこの時期に近い住居址の大きさについて、東京都志村遺跡の真間期の住居址を例にとると、総数15棟のうち15㎡以下の住居址は10棟を占め、同時に53㎡におよぶ大きな住居も一方には共存することを考えると、ここに階層分化を窺知できるともいえよう。しかしながら、他方小形の堅穴住居を、平地住居に附属する竈屋的性格の小屋であるという意見もあり、現在の調査段階では十分に傾聴すべきであろう。従って今回調査した3棟の住居址の規模の小ささをもってただちに下層階級のものと結論することは躊躇せざるを得ない。

第2に問題となるのは、竈の構造である。すなわち、造り付け竈の上限と土師製竈への転換の時期について考えたい。まず造り付け竈については従来確実な発掘例が少なかったが最近相次いで検出されつつある。1969年、福岡県筑紫郡筑紫野町鬼面における南バイパス事前調査で、Ⅳ期の須恵器を出す住居址に造り付け竈を検出した。また同じく南バイパスによる福岡県筑紫郡筑紫野町針摺遺跡のⅢb期の住居址においても検出されたという。一方、1969年の三井郡小郡町津古遺跡におけるⅡの須恵器をもつ住居址には竈は検出されていない。従って今日までのところ、造り付け竈の上限はⅢb期まで遡り得るといえるが、Ⅲa期における状態が残された問題となっている。須恵器のⅢb期は土師器では鬼高Ⅰ式に相当するが、関東において造り付け竈の初源は鬼高期を若干さかのぼる時期と考えられているので、九州においても、須恵器のⅢa期に造り付け竈が存在する可能性は十分にあり得よう。次に造り付け竈から土師製竈への転換の時期については、後者の確実な発掘例が少ないので従来明確ではなかった。福岡県山門郡瀬高町鉾田から発見された土師製の竈は奈良期の遺物と相伴していたと云われる。^(註2) また岡山県高島遺跡の王泊第2層からも発見されているが、これは古墳後・末期とされた。^(註3) 今回の成屋形遺跡においては、Ⅵa期とした第1号住居址においては造り付け竈を確実に使用しており、Ⅶの後半期とした第3号住居址は土師製竈に変換している。従って、この両者の転換の時期はⅥbからⅦの前半期に求められよう。

(註1) 1970年度西日本史学会考古部会において、本遺跡の概要について報告したが、その際竈について小田富士雄氏より御教示を得た。

(註2) 鏡山猛「土師質竈の新例」九州考古学1 1957

(註3) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』1956

近年窯址の発掘調査によって九州においても古墳時代を中心とする時期について、主として須恵器の編年が確立されつつある。しかしながら、奈良・平安期のものについては良好な資料に恵まれない理由もあって不明確なところが少なくない。今回調査した第1、2号住居址の出土土器は極くわずかであったが、第3号住居址は比較的遺存度が良好であった。この住居址の遺物を須恵器Ⅶ期の後半に比定したが、今後の資料の増加によって再検討されるべき素材を提供するものであろう。

さいごに本遺跡が、道路下に半永久的に埋没してしまったことについて、調査担当者として深い悔恨の情を禁じ得ない。

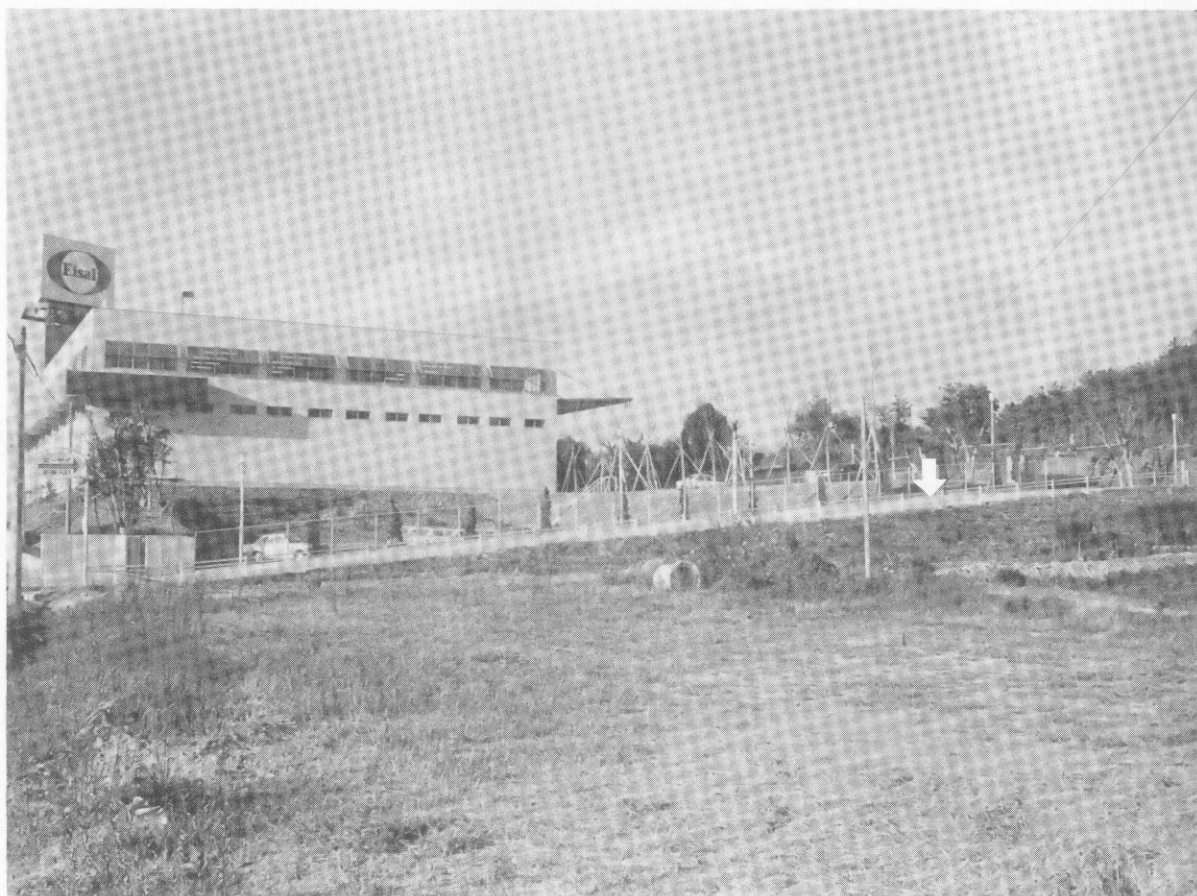


Fig.10 成屋形遺跡の現状（矢印位置）